

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370568

研究課題名(和文) 英語主語位置の通時的推移に関する情報構造論的研究：談話階層言語から命題階層言語へ

研究課題名(英文) A Study on the Impact of Information Structure on the Diachronic Shift of Subject Positions in English: From a Discourse Configurational Language to a Proposition Configurational Language

研究代表者

縄田 裕幸 (NAWATA, Hiroyuki)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：00325036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、生成統語論の枠組みで提案された「素性継承パラメタ」仮説に基づいて英語の主語位置の史的推移について実証的に調査するとともに、その変化を駆動するメカニズムを説明することを目指した。その結果、以下の点が明らかとなった。(i) 古英語から初期中英語では主語の情報ステータスに基づいて2つの統語位置が主語に対して利用可能であった。(ii) 上位位置と下方主語位置がともに下方に推移した結果、後期中英語から初期近代英語にかけては、2つの主語位置が自由変異となった。(iii) 後期近代英語以降は、主語の統語位置が1つに統合された。またこの分析の妥当性を他の通時的変化や共通時的変異によっても検証した。

研究成果の概要(英文)：This study has aimed to investigate how syntactic positions for subjects have changed in the history of English and provide an explanation of the mechanism that drives the change, in view of the "Feature Inheritance Parameter Hypothesis" proposed under the generative syntax. We have revealed the following: (i) From Old English to Early Middle English, two syntactic positions were available for subjects in accordance with their information value; (ii) however, these two positions underwent an downward shift in the syntactic structure, so that they came to serve as free variants in Late Middle English through Early Modern English; (iii) finally, the subject positions were unified in Late Modern English. The validity of our analysis has also been tested against other diachronic changes and cross-linguistic variations.

研究分野：言語学・英語学

キーワード：生成統語論 言語変化 英語史 パラメター 素性継承 主語位置 動詞移動 補文標識

1. 研究開始当初の背景

従来の伝統的な統語論研究は「統語論の自律性のテーゼ」と「言語の共時態の重視」によって特徴付けられてきた。しかしながら1980年代後半以降、このような潮流に変化が生じてきている。一方では、言語構造の適格性に情報構造が果たす役割が広く認識されるようになった。また他方では、共時的現象をもとに開発された理論が通時的現象にも適用できることが明らかとなってきた。

また、研究代表者はこれまで主として統語論と形態論のインターフェイスの観点から英語の通時的変化の解明に取り組んできた。それを受けて本研究では、解釈側のインターフェイスに着目することでこれまでの研究を補完し、英語が話題要素の卓立する談話階層型言語から主語が卓立する命題階層型言語へと変化した過程を、より包括的に記述・説明することを目指した。

具体的には、代表者は本研究に先立つ予備的調査において、時の副詞と主語の相対位置に関するデータから、英語の主語が統語構造上で下方に推移したのではないかという着想を得た。これは、英語の主語位置が上方に推移したことを主張する先行研究(Kemenade and Los (2006))の反例となる証拠であり、追求するに値するテーマであると確信するに至った。

2. 研究の目的

上記のような背景を踏まえ、本研究は後期中英語から初期近代英語にかけての主語位置の変遷に焦点を当て、英語が談話階層型言語から命題階層型言語へと変化した過程を記述するとともに、生成統語論の枠組みを用いて説明することを目指した。その際、主語の共時的分布と通時的変遷に対して情報構造が果たした役割に特に注目した。また、本研究の成果によって、言語間の共時的・通時的変異を司るパラメーターの特性を明らかにし、近代英語期に生じた他の統語変化や英語と他言語(特に日本語)の共時的変異にも応用することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle Englishなどの通時的英語コーパスを用いて主語と他の要素との相対的位置関係の変遷を実証的に明らかにした上で、言語理論(生成統語論)を用いてその変化のメカニズムを説明するという手法を用いた。具体的手順は以下のとおりである。

(i) 後期中英語の主語位置に関する共時的調査分析：まずはPenn-Helsinki Parsed Corpus of Middle Englishを用いて後期中英語の主語の

分布に関する基礎的資料を収集した。その際、主語と文副詞の相対的語順を手がかりとした。その上で、Rizzi (1997)以来研究が進められている句構造の細分化(カートグラフィ)の手法を用いて、後期中英語に利用可能であった2つの主語位置が統語構造上どこに現れていたか、また当該の位置における主語の出現が統語派生の中でどのように動機付けられていたかを理論的に記述・説明することを試みた。

(ii) 初期近代英語における通時的変化の調査分析：次に、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern Englishにより、初期近代英語における主語位置の変化を調査した。そして、中英語からの変化を「素性継承パラメタ」仮説(下記参照)に基づいて分析した。

(iii) 分析の拡張と応用：(i) および(ii)で得られた主語位置の通時的推移に関する理論的分析の妥当性を、他の通時的・共時的変異からも検証した。具体的には、後期近代的英語における残留動詞移動と日本語の補文標識構造について論じた。

4. 研究成果

(1) 英語主語位置の通時的変遷(学会発表②④⑤, 図書②)

本研究の中心的主題である主語位置の通時的変遷に関しては、以下のような構造変化があったとの結論が得られた。

- 古英語(OE)-後期中英語(EME)
[ForceP Force [TopP Subj. Top_[uNum] [FinP Subj. Fin_[uPer] [TP T_[tense] vP]]]]
- 後期中英語(LME)-初期近代英語(EModE)
[ForceP Force [FinP Subj. Fin_[uΦ] [TP Subj. T_[tense] vP]]]
- 後期近代英語(LModE)-現代英語(PE)
[ForceP Force [FinP Fin [TP Subj. T_[uΦ, tense] vP]]]

OEからEMEにかけては、主語の統語位置は当該主語の情報ステータスによって使い分けられていた。すなわち、話題として解釈される定名詞句と代名詞が話題句(TopP)指定部を占める一方で、新情報として解釈される不定名詞句は定性句(FinP)指定部に位置していた。LMEでも引き続き2つの主語位置が利用可能であったが、上位主語がFinP指定部に、下位主語が時制句(TP)指定部に下方推移した結果、2つの主語位置は自由変異となり、情報ステータスによる使い分けは消失した。さらに、LModEになると主語位置はTP指定部へと統一され、この状態がPEまで続いている。

この結果は、Nawata (2009, 2014), 縄田(2013)において提案された「素性継承パラメタ」仮説を裏付けるものである。この仮説は、

英語の通時的変化において一致素性の分布が以下のように変化したとする説である。

- OE- EME
 $[_{\text{ForceP}} \text{Force } [_{\text{TopP}} \text{Top}_{[\text{uNum}]}] [_{\text{FinP}} \text{Fin}_{[\text{uPer}]}] [_{\text{TP}} \text{T}_{[\text{tense}]} \text{VP}]]]]$
- LME- EModE
 $[_{\text{ForceP}} \text{Force } [_{\text{FinP}} \text{Fin}_{[\text{u}\phi]}] [_{\text{TP}} \text{T}_{[\text{tense}]} \text{VP}]]]]$
- LModE- PE
 $[_{\text{ForceP}} \text{Force } [_{\text{FinP}} \text{Fin} [_{\text{TP}} \text{T}_{[\text{u}\phi, \text{tense}]} \text{VP}]]]]$

この仮説の理論的な基盤となっているのは Chomsky (2008) で提唱された素性継承のアイデアである。それによれば、解釈不可能な一致素性と時制素性はフェイズ主要部Cに基底生成され、派生の途中でTへと継承される。他方で、Rizzi (1997) 以来のカートグラフィ研究によって、Cの領域は発話効力(Force)、話題(Topic), 焦点(Focus), 定性(Finiteness)などを表す範疇に細分化されることが明らかになってきている。上記の仮説は、OEからEMEにかけてはTopが解釈不可能な数素性([uNum])を、Finが解釈不可能な人称素性([uPer])をそれぞれ担っていたのに対し、LMEからEModEでは[uNum]と[uPer]を束ねた解釈不可能な一致素性([u\phi])がFinへと継承されるようになり、最後にLModEに[u\phi]がTへと継承されるようになったことを主張している。

本研究の分析がもたらす類型論的な帰結について触れると、主語位置へのA移動に関して、Miyagawa (2010)は当該の移動が一致素性に依存して生じる英語タイプの一貫基盤型(=主語卓越型)言語と、焦点素性に依存して生じる日本語タイプの談話階層型言語に大別している。本稿の分析が正しければ、英語はOEからEMEにかけては主語が必ずCP領域を占めて談話上の解釈を受ける談話階層型言語であったが、LMEに主語がTP領域へと下方に推移することでそのような特性が失われ、主語卓越型の言語になったといえる。Miyagawaが両タイプの言語の違いを主語移動を駆動する素性の違いに求めたのに対し、本稿の分析では英語史における談話階層型から主語卓越型へという類型論的变化は、主語移動を駆動する一致素性を担う機能範疇が推移したことで生じたということになる。

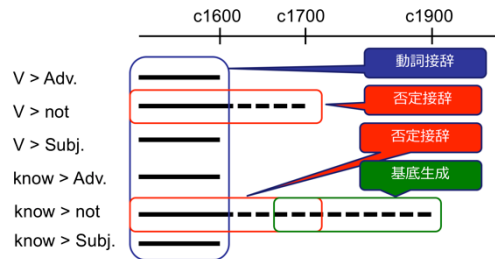
(2) 後期近代的英語における残留動詞移動(雑誌論文①, 学会発表①, 図書③)

Nawata (2009 et seq.)は素性継承パラメタを英語史における定形動詞の推移を捉えるために提案していた。すなわち、[uNum]がTopに継承されていたOEからEMEではTopが義務的に活性化して動詞第二位(verb second: V2)語順が生じ、[u\phi]がFinにあるLMEからEModEでは定形動詞が[u\phi]によって具現化される屈折接辞と融合するために少なくともTまでは上昇しなければならなかった、という具合である。これによれば、LModEで

は定形動詞がVP副詞や否定辞notに先行する語順が完全に消失したことが予想されるが、実際にはknow, believe, doubt, careなど一部の動詞はこの語順変化に抵抗し、否定文において引き続き古い語順を示し続けた。そこで、(1)で得られた結論の理論的基盤となっている素性継承パラメタの妥当性を示すために、見かけ上の反例であるLModEの残留動詞移動について、文法化の観点から調査・分析を行った。

具体的には、knowなどの動詞はEModEで1人称主語における主観的用法が引き金となって軽動詞としての用法を発達させ、これらが否定を表すNegPよりも上位で基底生成された結果、見かけ上の残留動詞移動現象が生じたことを明らかにした。これは、「疑念」の強い主観的意味を表すdoubtが、know, believe, careに比べていっそう強い抵抗を示したことからも支持される。

ModEにおける動詞移動の消失過程をまとめると、以下の図のようになる。



図：動詞移動の消失と対応する駆動因

ここから、ModEにおける「本動詞-not」語順は3つの要因により派生されていたことがわかる。「本動詞-主語」語順と「本動詞-副詞」語順は、ともに豊かな動詞一致形態素(より具体的には、Finによって担われる一致素性)に起因し、これらは1600年前後に一致形態素が消失するとともに衰退した。また「本動詞-not」語順はNegの[affix]特性とPFの適格性条件「二重詰めNegフィルター」によりもたらされ、およそ1700年まで随意的に用いられた。最後に、know類動詞の残留動詞移動は文法化によるものであり、これらの動詞がnotに先行する語順は移動ではなく、基底生成により派生された。このように、いわゆる「動詞移動」は単一の統語操作ではなく、統語的・音韻的・語彙的要因が絡み合った複合的な現象であると考えられることによって、ModEにおける動詞移動現象の全体像を捉えることができた。

もし本研究の分析が正しければ、動詞移動に関する共時的・通時的な研究で問題となる「豊かな一致の仮説(RAH)」に関して示唆を与えることができる。一般に、動詞移動の有無と一致形態素の豊かさの間に何らかの相関関係があることが広く認められているが、争点となっているのは両者の間にどの程度強い因果関係が存在するかということである。

る。ある論は豊かな一致が動詞移動の必要十分条件であるとする「強い RAH」を唱えているのに対し、別の論者は豊かな一致が動詞移動の十分条件にすぎないとする「弱い RAH」を主張している。

従来の英語史研究では、主として否定辞 not との相関関係に着目して動詞移動の消失時期を特定しようとしてきた。そうすると、1600 年前後に動詞の一致形態素が衰退した後、少なくとも EMod を通じて「本動詞-not」語順が観察され、さらに know 類動詞を考慮に入れると LModE まで動詞移動が存続していたことになる。よって英語史の事実は「弱い RAH」を支持すると考えられてきた。しかし、本研究が主張するように否定文における動詞移動が豊かな一致とは別の要因によるものであるとすると、「本動詞-not」語順の存否は RAH に関する議論には直接関係しないことになる。RAH の射程を統語的主要部移動に限定するかぎりにおいて、本研究の分析は強い RAH の立場を支持する。

(3) 日本語の補文標識構造 (雑誌論文②, 学会発表③, 図書①)

英語主語位置の通時的変遷を分析する際に CP カートグラフィーを用いたが、そこでの成果を日本語の補文標識「と」「って」「っと」「と」の分析に援用した。そして、これら 4 つの補文標識が 3 種類の Force と汎用的機能範疇 F に対応すると提案した。具体的対応関係は以下の通りである。

- ・と: Force_{report}
- ・って: Force_{quote}
- ・っと: Force_{speechact}
- ・て: F

また、それぞれの補文標識の具現化に関して、以下の提案を行った。

- ・F に相当する「て」が Fin に相当する-t と併合することによって、Force_{quote} としての「って」が派生される。
- ・Force_{report} に相当する「と」が Fin に相当する-t と併合することによって、Force_{speechact} としての「っと」が派生される。

これらの仮定によって、「と」と「って」が埋め込み節で用いられる一方で、「って」と「っと」が主節で用いられるという事実に対して説明を与えることができた。

また、本研究における分析の帰結として、日本語の終助詞「ね」「さ」「よ」も上記の補文標識と同様に Force の亜種であることを明らかにした。Cinque (1999) などの先行研究では日本語の終助詞に相当するムード表現はイタリア語などでは IP 領域にあるとされているが、われわれの分析が正しければ、これらの表現は日本語では CP 領域にあることになる。このような統語的階層関係の通言語的

相違は、カートグラフィーに基づく言語変化・変異の研究において、今後いっそうの解明が俟たれる領域である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 縄田裕幸「後期近代英語における残留動詞移動と know 類動詞の文法化」『島根大学教育学部紀要』51, 69-79, (2017) 査読無。
- ② Hirose, Tomio and Hiroyuki Nawata “On the Quotative Complementizer *-Te* in Japanese,” *Semantics-Syntax Interface* 3, 1-29, (2016) 査読有。

[学会発表] (計 5 件)

- ① 縄田裕幸「動詞移動は何によって駆動されるか: 英語史における残留動詞移動現象からの考察」, 言語変化・言語変異ユニット第 3 回ワークショップ, 2016 年 9 月 8 日, 東北大学。
- ② 縄田裕幸「談話階層言語から命題階層言語へ: 英語における史的素性推移とその帰結」第 3 回史的英語史研究会, 2016 年 8 月 18 日, 島根大学。(招待講演)
- ③ Hirose, Tomio and Hiroyuki Nawata ““Complementizers” and the Right Periphery of Japanese,” *International Workshop of Syntactic Cartography* 2015, 2015 年 12 月 6 日, 北京語言大学。
- ④ 縄田裕幸「統語的変異の出現と収束」, 日本英語学会第 32 回大会シンポジウム「言語変化に対する多角的アプローチ」, 2014 年 11 月 9 日, 学習院大学。
- ⑤ 縄田裕幸「英語における主語位置の通時的変遷: 下方推移分析」, 言語変化・言語変異ユニット第 1 回ワークショップ, 2014 年 9 月 9 日。

[図書] (計 3 件)

- ① Hirose, Tomio and Hiroyuki Nawata ““Complementizers” and the Right Periphery of Japanese,” *Studies on Syntactic Cartography*, ed. by Fizhen Si, China Social Sciences Press, 425-446, (2017) 査読無。
- ② 縄田裕幸「英語主語位置の通時的下方推移分析」, 小川芳樹・長野明子・菊池朗 (編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』, 107-123, (2016) 査読無。
- ③ 縄田裕幸「I know not why—後期近代英語における残留動詞移動」, 田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗 (編)『文法変化と言語理論』, 192-206, (2016) 査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

縄田 裕幸 (NAWATA, Hiroyuki)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号: 00325036